

第 1 回日立市コミュニティ活動の在り方検討委員会 議事要旨

日 時 令和 2 年 1 月 29 日（水） 午後 2 時から午後 4 時まで

場 所 日立市役所 多目的ホール

出席者 委員 21 名 （欠席：富田委員）

<会議概要>

1 開会

2 委嘱状交付

委員を代表して吉田真緒委員に、吉成副市長から委嘱状を交付した。

3 副市長挨拶

- ・本市の誇りであり、まちづくりのパートナーであるコミュニティ活動は、次世代への継承などが大きな課題であることから、持続可能なコミュニティ活動の在り方を検討し、コミュニティとの協働をより一層推進してまちづくりを進めたいと考えている。
- ・市民の皆様が安心して生き生きとした生活を 10 年、20 年と続けていけるまちとなるよう、日立市の重点対策事業として検討委員会を位置づけているので、自由闊達な意見や私見を寄せてもらい、新たな時代にふさわしい持続可能なまちづくりの実現に向けて、御審議をお願いしたい。

4 委員紹介

事務局から委員紹介、事務局職員の紹介

5 設置要綱について

設置要綱について説明

6 委員長及び副委員長の選任

日立市コミュニティ活動の在り方検討委員会設置要綱第 6 条第 1 項の規定に基づき、委員の互選により、委員長に砂金祐年常磐大学准教授、副委員長に日立市コミュニティ推進協議会石川諒一会長が選任された。

○委員長挨拶

- ・日立市はコミュニティの先進地であるが、その日立市でさえ岐路に立たされている。人々の価値観・考え方の変化があり、コミュニティや自治会・町内会など地域に関わることを負担に感じたり、避けたりしている方が増えている。人口減少や少子高齢化などの社会の変化が影響しているが、一方で、災害時などに顕著に表れるように地域の絆が重要であることは、間違いない。

- ・市民と行政の協働において、中心となるのが、自治会・町内会、コミュニティであり、市民に自治会・町内会やコミュニティの存在意義を理解・再認識してもらうこと、自治会・町内会やコミュニティが時代に合わせて変化していくという2点が必要である。
- ・先例の少ない問題であり、熟議と試行錯誤が必要であるが、皆様の忌憚のない意見を通じて、問題の本質を探り、解決に一步でも近づいていきたい。

○副委員長挨拶

- ・コミュニティは地域の全住民、全世帯を対象にする活動ということが肝になっているため、組織の成り立ちは町内会・自治会が最小単位であり、広報紙の配布から再生資源の回収など、住民サービスというよりも行政を支援する活動がメインになっている。
- ・この10数年間の間に、町内会・自治会の解散や脱退が急速に進み、住民にとってのコミュニティの存在意義は急激に薄らいでいるが、行政にとってはますます必要な存在になっている。
- ・それを踏まえて、ゼロから全市民・全世帯に受け入れられるコミュニティとはどのような形にしていくのが良いのか、皆さんから意見をいただきながら考えていきたい。

7 会議の進め方について

事務局から以下3点について説明し了承された。

- (1) 会議については原則公開、傍聴可能
- (2) 会議の内容を要約版として作成ホームページ等で公開
- (3) 会議資料をホームページ等で公開

8 委員会設置の主旨について

主旨説明資料「日立市コミュニティ活動の在り方検討事業」に基づき、事務局からパワーポイントを用いて説明した。

9 意見交換

各委員から自己紹介を兼ねてコミュニティや地域活動に対する考え等について発言をいただき、意見交換を行った。

○委員

- ・全国的にコミュニティの弱体化は進んでいるが、その背景には、担い手の高齢化及び後継者不足が挙げられる。行事等を縮小していく傾向ではあるが、キーワー

ドは地域社会の活性化である。

- ・人口減少は仕方がないので、移住者や新たな担い手を探っていく。地域協力隊とコラボして、中里地区での活動を行ったりもしているので、専門である経済や地域活性化の観点から、コミュニティや中小企業の再生というところから発言していきたい。
- ・地域愛を育むということや歴史を学ぶことを通じ、地域の良さを再発見することで、コミュニティの再生につながっていくと感じている。

○委員

- ・コミュニティ活動を行っている各学区の会長がいろいろ提案するよりも、委員の皆さんからいろいろな意見をいただいて、コミュニティ活動に取り入れたい。
- ・各コミュニティの会長はコミュニティの行事等をやりながら、行政からもいろいろと委嘱されている。また、町内会・自治会の解散や退会者が多くなり、防犯灯の管理や市報の配布も出来なくなっており、その辺をコミュニティ側として説明していきたい。

○委員

- ・私たちの地区は高齢化率が50%を超えている自治会があり、元気な高齢者は交流センターに来ていろいろな活動を行っているが、足が不自由な方や体力がない方はなかなか来ることができない。
- ・移動手段の確保のため、一番高齢化率の高い団地については、福祉タクシーや10人乗りの電気自動車を試験的に取り入れている。
- ・好きでないと活動は出来ないなので、好きな人をいかに集められるかに掛かっている。皆さんからの意見を参考にしたい。

○委員

- ・皆さんの手元に渡っている「日立市コミュニティ活動ハンドブック」を読み返してみたが、この9割以上は実際に活動している内容である。
- ・日々このような活動を行っているが、自分たちでも何をやっているか分からなくなっている場面もあると思うので、この委員会で新たなコミュニティの在り方を検討してもらえると助かる。

○委員

- ・市長がひたちらしさの一つにコミュニティ活動をあげており、行政とコミュニティが協働してまちづくりを進めている点については、多くの方が評価している。
- ・しかし、「自分の地域は自分の創意と努力でつくり上げる」、「全員が当事者」とう

たっちはいるが、現状とは大きくかけ離れている。

- ・このような中で、日立市のコミュニティ組織が、町内会・自治会を基盤とした従来のものでよいかどうかということから検討し、地域福祉や防災の観点、全住民が対象となる組織の見直しを優先的に考えて、活動の在り方を見直していくべきではないかと思う。

○委員

- ・今までどおり自治会・町内会を基盤に活動していくというよりは、そこに負担感がないようなものにしていく必要がある。
- ・若い人たちがそこに関われるような世の中の状況ではなく、70歳以上の方もまだ働いている状況である。それを受けて、コミュニティ自体が住民に役に立つ事業を組み立てていくことが重要だと思う。
- ・社協を中心とした高齢者の見守りや、行政の各課と連携しながら、ひたちらしいものを見つけていくのもコミュニティの仕事だと思う。
- ・行政の仕事というのではなく、コミュニティとしてもどうしていくのかを考えていかないと、全国に誇れるコミュニティと言っていたではいるが、全然そうになっていないと言わざるを得ないので、その辺りをきちんと考えていきたい。

○委員

- ・配食、有償運送、生活支援、サロン、子ども食堂、交流支援などを担っている。
- ・2025年問題などに対して悪あがきをしているような状況であり、NPO法人は、地域の方になかなか受け入れていただけないところもあるが、行政では届かない、企業では手を出せない、自主団体では継続が難しいというような部分を担っており、全市的なニーズがある移動手段等の問題に対して、活動範囲が広がっている状況である。

○委員

- ・いろいろな団体がコミュニティ組織とは違った動きになっていて、各団体が日立市のコミュニティ組織とどういった関わり方が出来るのかを考えてく必要がある。
- ・現在の活動の中で、不便に感じるところや何とかならないかと思うところをお話していきたい。

○委員

- ・私の町内会は20年前は19世帯あったが、現在は9世帯になって、その中で町内会に加入しているのは5世帯だけである。
- ・町内会に入らない理由は、近所付き合いが煩わしいというようなことであり、市

報の配布や再生資源回収の当番、月1回の清掃活動、年1回の総会が主な活動である。

- ・あんず並木を育てる会は、昭和40年に日立市の市民運動の先駆けとして発足し、老人会、婦人会、子ども会といった団体に参加してもらい、約120名程の会員あったが、老人会も婦人会も子ども会もなくなり、33名の会員で実際に活動出来ているのは15名くらいである。
- ・地域の中での助け合いという考え方が段々薄れてきてしまっており、お互いさまという気持ちを思い起こさないと、これからのコミュニティ活動も成り立たないのではないか。

○委員

- ・助川学区に住み地域福祉活動を行っているが、マンションがたくさん建っている地域であり、マンション住民は町内会という組織と考え方が異なる。
- ・高齢化も進み、子どもたちも東京に出ていき夫婦のみという世帯も増え、町内会も解散している。町内会を続けたい気持ちもあるが、役員等もかなりの負担になっており、隣近所で助け合えるようでないといけない。
- ・昔のように、お醤油が足りなくなったから貸してと言えるような近所付き合いが必要であり、コンビニ等が立ち並び、お隣に頼ることもなくなってしまったが、隣近所のつながりを元に戻していきたいと思う。

○委員

- ・豊浦学区に住んでおり、11年間交流センターで協力員として働いた。
- ・豊浦学区のコミュニティの環境美化部に入り、国道6号線の花壇の手入れを小学生や中学生、高校生と一緒にやっている。

○委員

- ・ごみの日のネットの片づけを隣の奥様と競っており、いつも先に片づけられているが、先日雨の日に久しぶりに先に片づけられた。こうした小さな活動一つにしても、競うことで楽しみながらやっている。
- ・資料を送ってもらい、コミュニティ活動の様子がよく見えてきたが、市全体で地域包括的なコミュニティ活動を進めていただきたい。
- ・各地域の自主性や主体性はもちろん大切だが、少子高齢という現状からも必要と感じる。実際に様々な方策がとられているとは思いますが、市民の声がキーワードの一つになる。
- ・例えば大洗町では、高齢者向けの移動販売だけではなく、スーパーと連携し、買

い物に行くコミュニティバスを出していると聞いている。

- ・ふくしとは「ふ」だんの「く」らしの「し」あわせだと言われているので、コミュニティ活動と協力できることも多いと思う。

○委員

- ・茨城大学教育学部に所属している。まだ学生ということで、知識等も未熟ではあるが、若さを生かした学生からの意見をしていきたい。どの世代にフォーカスして、どのような活動を行っていくかを重視したい。
- ・高齢者に向けてなのか、若者に向けてなのかによって、どのような活動をしていくべきなのかも、どのように広めていくべきなのかも変わっていく。その中で、若者や働き世代に見合った広め方について意見をしていきたい。

○委員

- ・日立市民生委員児童委員連絡協議会の会長をしている。そういった立場で参加しているが、民生委員は福祉活動をメインに活動をしている。
- ・コミュニティとの関わりについても、コミュニティの中に地区社協が組み込まれて以来、かなり強くなっている。
- ・避難行動要支援者名簿作成や安心安全ネットワークについては、重点的に活動しているが、地区割りがコミュニティは小学校単位、民児協は中学校単位ということもあって、コミュニティ活動の中での民生委員活動は少しじっくりこない部分もあるので、互いに協力し合える形を作っていきたい。
- ・個人としても、30年近くコミュニティにも関わっているが、交流センターが各地区に出来て、地区内での交流、集まりは活発になったように感じる。
- ・しかし、町内会・自治会の加入率は下がっている。メリットもないし、自分たちには関係ないという意見も多く聞かれる。全住民が対象となると回覧板や市報が届かないと、情報が行き届かないということになってしまうので、問題が出てくると考えている。

○委員

- ・ひたち生き生き百年塾の副本部長をしている。百年塾では、コミュニティとの連携講座や学区の中での生涯学習推進員の方たちと、意見交換をしている。
- ・百年塾に入ってくる推進員の方は、地域活動をしていない方が多いので、生涯学習活動は全域で行っているが、最後は地域だということを伝えながら活動している。
- ・個人的には、会瀬学区コミュニティ推進会の副会長もしているので、会瀬で子ど

も時代あるいは子育て時代を過ごせてよかったなと思ってもらえるように、地域は大事ということを感じてもらえるようにしていきたい。

○委員

- ・ 日立市小中学校PTA联合会から来ている。小中学校PTAに関わって14年になるが、親の考え方も14年前とはかなり変わってきて、学校の役員でさえ手が上がらない。
- ・ こういう状況の中で、コミュニティの担い手というのはなかなか難しいように感じる。私の町内会では正月に集まりがあり、私は家族全員でいつも参加し、何かあったときにお世話になるので顔を見せておくことが大事と思っている。
- ・ そういったつながりの希薄さからコミュニティがうまくいっていないのではないか。学校やPTAとしても、親も一緒に、3世代同居しているというのであれば、3世代関わられるようなことをしながら、地域と関わっていけるとよい。

○委員

- ・ 所属は多賀中学校である。市内いろんなところで働いてきたが、どの学校でも子どもたちは地域の中で育てられながら、学校教育では出来ない大事な部分を地域に担っていただいている。
- ・ 少子化で子どもが減るということは学級数が減り、職員数も減るということである。同じ学校行事でも少ない職員数で行わなければいけないので、運営が厳しくなっているという事実がある。
- ・ 学校運営協議会制度が試行錯誤しながらスタートしているが、地域の方と一緒に子どもの育成のパートナーとして手を組んでやっていこうというものであるので、この検討委員会に参加させていただいた。
- ・ 子どもたちにとって学校が果たす役割、地域の方に担ってもらう役割が明確になり、子どものために手を取り合っていけるようなコミュニティになっていけたらいいと思う。

○委員

- ・ 社会福祉協議会に所属している。社会福祉協議会は市民に理解されていなく、市民アンケートでも名称や活動内容について全く分からないという方が3割いるという結果が出ている。
- ・ コミュニティ活動については、平成2年から約30年間多種多様な事業展開をしている。子育て支援から、高齢者まで毎日型の地域活動を進めている。
- ・ そういった中で、一所懸命やってはいるが人手不足というのが現状である。少子

高齢化により、家族機能が低下していくとなると地域の中で助け合っていないといけない。地域だけではなく、専門機関との連携を図るなど、包括的に考えていかないと持続可能なコミュニティ活動は成立しない。

- ・個人的にも自治会の副会長をしていて、コミュニティ担当し、いろいろな行事をコミュニティ単会で行っているのので、これからのコミュニティ活動、地域活動をしっかり支えていくようなまちづくりを進めていきたい。

○委員

- ・日立市の生活環境部長として出席している。皆様には委員を引き受けていただき感謝申し上げたい。
- ・日立市のコミュニティ活動は、他市に誇れる大きな財産であり、東日本大震災においては、各地域のコミュニティ組織において、炊き出しを率先して行うなど、互助・共助を主導して、早期の復興に大きな役割を果たしていただいた。
- ・日立市が住み続けたいまち、あるいは住んでもらうまちとして選んでいただくためには、もっと身近な地域活動が重要な要素になってくる。
- ・今後議論を重ねて、具体的で実行性のある在り方について探っていきたいので、よろしく願いしたい。

○副委員長

- ・ここに参加している皆様は何らかの形で、地域の役に立ちたいという積極的な方たちなので、ボランティア活動等が成り立っていると認識している。
- ・少子高齢化の時代であることは間違いないが、それが直接コミュニティの弱体化につながっているとは思っていない。高齢者がたくさんいるおかげで、今のコミュニティが維持されているとすら感じる。
- ・コミュニティは40～50年前には、必要とされていて自然に出来た組織であり、それを利用しているので、行政側にとっては素晴らしい組織となっている。住んでいる住民にとって必要な組織であれば、みんな参加していると思うがこのような状態にはなっていない。
- ・ネット社会であるとか、車社会であるとか、いろいろなことが影響して地域を限定しての活動は難しくなっているが、NPOや百年塾のように横断的に活動をしている皆さんにご意見をいただいて、参加していない人たちがいかに参加してもらえるかという観点でぜひ検討してほしい。

○委員長

- ・皆さんのお話を伺っていて思い出したものとして、「絆」について授業で話してい

る内容がある。「絆」という字には二つの読み方があり、一つは「きずな」だが、一つは「ほだし」である。

- ・ほだしというのは牛や馬を縛りつけるもの、つまり手かせ足かせ。「絆」という字にはいい意味での「きずな」という側面と、人々を縛るという「ほだし」の側面がある。この両側面が昔からある中で、かつては「きずな」のメリットがはるかに大きく、「きずな」が無ければ生活できなかつた。
- ・冠婚葬祭もその一つであり、日常生活でも物の貸し借りも当たり前であり、「きずな」がなければ地域で生きていけなかつた。
- ・しかし、経済成長に伴いきずなが無くても生活ができるようになってきた。冠婚葬祭もお金を払えば仕事としてやってもらえ、物がなくなってもコンビニでいつでも買えるようになった。そうして、「きずな」が無くてもよくなってくると、「ほだし」の煩わしさが目立ってきている。
- ・皆さんからも負担感や、メリットがない、忙しいという言葉があつたが、アンケートでも地域活動に参加していない方が61.4%いて、関心がない方が43.7%いるという結果が出ているように、日立市のコミュニティは全住民が対象と言いながら、実際は参加していない人が6割いるというところに問題がある。
- ・一方で、今の若者が地域に関心がないということはなく、むしろ熱心とすら感じるし、喜んで地域活動をしている。ただ地域とうまく結びついていないと感じる部分が多いので、そこをうまく結びつけることが重要で、課題解決に結びついていくのではないかと。

○委員

- ・町内会とコミュニティの関係がうまくいっていない。町内会には町内会の活動があり、コミュニティの活動との関係がきちんとしていないように感じる。
- ・町内会に入っていないくて、コミュニティの集まり等には来る方がたくさんいるので、コミュニティの下に町内会があるという考え方は違うのではないかと思う。

○副委員長

- ・23学区にコミュニティがあるが、それぞれ町内会があつて初めてある組織であり、コミュニティ推進会が独立して作っている組織ではないと思っている。
- ・NPOなど専門的な活動をしている方たちには、自分のところのコミュニティがどんな活動をしているのかをもっと知ってもらいたいと思う。

○委員

- ・コミュニティ推進員という方が、町内会から一人ずつ出て、コミュニティ推進会

を作っているという形が理想なのだと思うが、コミュニティの各専門部の下でコミュニティ活動は行われていて、各推進員がいる町内会はまた違うのではないかと思う。

○副委員長

- ・各コミュニティには各専門部があり、その人事については各学区の特徴がある。私の学区では、推進員に各地域から出してもらって、その中から各部の部長を選んでいる。

○委員

- ・その考え方は違うのではないか。地区でやり方は違うのかもしれないが、地域からももちろん出てきてはもらうが、その方たちの役割というのは、学区の中を動かすというよりも、地域の情報を伝達してもらうことであり、学区を動かしているいろいろなテーマは長年そのことをやっている人たちが行っていると思う。

○委員

- ・直接関わっていない方々は配布された資料をよく読んで、現在行われているコミュニティについていいのか悪いのか、地域住民がどういう風に参加しているのかも含めて理解してもらって、今後はコミュニティ推進会はこういう風にしていくといいという意見をいただきたい。

○委員

- ・23学区のコミュニティが全て、自治会・町内会と一緒に組織として活動しているというわけではない。
- ・日立市コミュニティ推進協議会として統一しているわけではなく、コミュニティから自治会・町内会に助成金を出しているところも、そうではないところもある。
- ・私のところでは、コミュニティの中に自治会・町内会の会長が来るのは年に一度の総会だけである。

○委員

- ・茨城キリスト教大学で行っている、百年塾の市民カレッジという講座を終えて、市民カレッジに入って来てくれた推進員の方たちがコミュニティのことは分かりませんと言っていて、その方たちには、23学区のコミュニティが全て同じではないということは伝えている。
- ・百年塾でコミュニティ推進協議会の会長にコミュニティの話をしてもらう際にも、受講者の中にはもっと詳しく話してほしいという人もいるが、地域ごとに違いがあるので、一つの学区の人が詳しく話すのは難しく、地域で出している情報紙を

読んでくださいというのが現状である。

- ・ 検討委員会を進める中で、市民に向けて一つの括りとしてコミュニティ全体が見えてくるようなものを出していかないといけない。現状では市民がどうやってコミュニティ活動、地域に入っていけばいいか分からない。分かりやすくコミュニティ活動に入っていけるようにしていけるといい。

10 その他

- (1) 今後のスケジュール（案）について
原案のとおり
- (2) 次回の日程等について
次回は2月28日（金）午後2時から日立市役所多目的ホールで開催
- (3) 「令和元年度コミュニティのつどい講演会」の開催について
日立市コミュニティ推進協議会主催の講演会の開催の案内

以 上